

飼育report レポ

専門化する動物園における動物の飼育と展示に関する業務への対応の一つとして、秋田市では令和2年度から動物専門員の職種を導入しました。今回は新たに配属された4人の動物専門員にそれぞれの思いをききました。

シニア動物のごはん

飼育展示担当 奥山 麻裕子

大森山動物園で嘱託の飼育員として13年間勤務し、今年の4月から新たに動物専門員として採用されました。現在わたしが担当している動物の中で、ライオンとオオカミには高齢の個体があり、高齢動物のケアが課題となっています。今回はそのお話をしたいと思います。

人間と同じく動物たちも年齢を重ねるごとに身体に様々な変化が現れますが、ライオンやオオカミなどの肉食獣でわかりやすいのが食欲の減退です。高齢になるにつれて代謝スピードが落ちるため、それに比例して食欲も減り、痩せて体力が落ちてしまいます。動物園の大型肉食獣には鶏肉や馬肉など様々な種類の肉を給餌しますが、食欲が無い高齢個体には、お肉の中でも栄養価が高い部位を小さく食べやすいサイズに切り分け、さらにできるだけ新鮮なものを選んで給餌します。そしてエサの準備で何よりも重要なのが、そ

の動物が「今」食べたいと思っているエサを選ぶことです。

高齢個体に関わらず、飼育している野生動物は体調や気まぐれで食いつきの良いエサが変化しますので、「今日は何を食べたい気分かな?」と動物を良く観察してメニューを決めます。大森山で生活する動物たちが、寿命を全うする日までできる限り健康で充実した生活を送れるよう、今後も飼育業務に努めています。



肉を食べるライオンのマンゴー(23歳)

命を繋ぐために

飼育展示担当 関谷 藍子

このたび、動物専門員として新規採用となりましたが、実は大森山動物園での飼育員歴は今年で10年目になります。これまで、特に大きな経験となったのが、希少種のワタボウシタマリンというサルの人工哺育を担当したことです。タマリンの赤ちゃんは、自分の子を認識できなかった母親に、生まれて間もなく、ケガを負わされてしまったため、その日のうちに保護し、人工哺育をすることになりました。当園では初となるタマリンの人工哺育に、不安も大きかったのですが、他園館からの情報や協力を得て、試行錯誤しながらチーム一丸となって、毎日、早朝から夜まで授乳や治療に夢中で取り組みました。手の平にすっぽり入ってしまう小さい生命をなんとか助けてあげたい一心でした。強くたくましく育つようにと願いを込めて、「レオ」と名付けたその個体は、無事、すくすくと成長し、現在は名古屋市の東山動植物園でお嫁

さんと仲良く元気に生活しているようです。

これまでの様々な経験を活かしながら、動物たちがリラックスして、より幸せに過ごせる環境を作ることを目指すとともに、お客様にもっと動物に興味を持って、楽しみながら学んでもらえるように、動物専門員として大森山動物園を盛り上げていきたいと考えています。



人工哺育で育ったレオ(2014年撮影)

動物病院から

歴代獣医師の 記録から思うこと

獣医師 高橋 拓

コミュニケーションの歴史を振り返ってみると「動物病院から」のコーナーは、1998年のNo.36から始まっています。最初の話は「ニホンザルの入れ墨」。現在は、サルの皮下にマイクロチップを入れて個体管理をしていますが、当時は顔に入れ墨をして個体を確認していた様子が書かれています。時間もかかるし、飼育員も一苦労だったようです。

私が印象的だった記事は、No.67でチンパンジーのジェーンが、不運にも

子どもが死んでしまっても絶対に自分の体から離さなかったという内容です。当時の獣医師には、どんなに姿形が変わっても我が子を誰にも渡したくない母の姿に見えたそうですが、最後は子どもを手渡してくれました。

この記事から私が過去にノドジロオマキザルの子を展示場で捕まえてその場で治療した経験を思い出しました。その時、母ザルは治療が終わるまで側で心配そうに見ていました。治療が終わると近寄ってきたので、手渡し

動物のためにできること

飼育展示担当 阿比留 優一

今年度から大森山動物園に動物専門員として採用されました。私は元々、静岡県の民間動物園で7年間勤務してきました。今まで自分が培ってきたことを、動物のために進化を続けている大森山動物園で活かしたいと考えながら働いています。現在、レッサーパンダの担当となり日々奮闘しています。担当になった当初は、レッサーパンダに警戒されて距離を取られていましたが、毎日声をかけて、ちょっとずつ距離を縮めていき、今では展示場に入ると私に向かって走って来てくれます。

動物園の動物たちは、心も体も健康な状態で生き生きと過ごしてもらうことが何より大切です。毎日なんの刺激もなく変化の乏しい環境で飼育をすると、野生では見られないような異常行動をとるようになります。

それを防ぐため、レッサーパンダではエサの笹やリンゴを1箇所に置くのではなく、展示場のいろいろな場所に置いたり隠したりします。そうすることで、レッサーパンダに運動を

促し、エサの獲得に費やす時間が増えることで心身の健康に繋がっていきます。

動物本来の行動を引き出し、動物たちのより幸せな暮らしを実現させるためには、動物本来の暮らしをしっかりと理解し、飼育下において何が足りていないのかを考えて動物たちと接していかなければなりません。

このことを常に意識しながら、動物専門員としてがんばっていきます。



動物の行動を理解した飼育をめざして

キリン担当1年目として

飼育展示担当 宮原 星

この春、動物専門員に採用され北海道から秋田に来ました。キョン、エミュー、キリンを担当しています。6月にキョンの出産、7月にキリンの出産と人工哺育など、短期間で貴重な機会に恵まれ、「毎日があっという間に過ぎていく」というのが正直な感想です。

今回は、動物専門員として初めて体験したキリンのリンリンの出産についてお話ししたいと思います。7月14日午前7時39分、監視カメラで破水を確認したとの連絡があり、大急ぎで現場に駆けつけると、赤ちゃんの足が出てきていました。人間に限らず、動物も出産には様々な危険が伴います。ましてやキリンのように大きな動物となると、私たち飼育員にできることはそう多くありません。私は緊張しながら見守っていました。そして午前9時48分、担当者全員がビックリするくらいの安産で赤ちゃんが誕生しました。その30分後には赤ちゃんは起立し歩き始めました。リンリンが子どもをうま

く世話することができず、現在は飼育員が毎日授乳を行っていますが、すくすく成長しています。

私は大森山動物園の職員としてだけでなく、社会人としてもまだまだ未熟です。今後も初めて経験することばかりだと思えますが、この貴重な経験に感謝し、キリンの成長をサポートしながら私自身も学び、成長していきたいと思っています。



キリンの赤ちゃんへの授乳

で子どもを返しました。母と子の絆の強さを感じ、「私たちのことを信じて待っていてくれたのかな?」と思える瞬間でした。

記事で多かった内容は、やはり動物の死と治療についてでした。必ずやってくる死と、同じ症例がほとんど無い動物園動物の治療について、獣医師としてどう向き合うか。色々な思いが交差するため、どうしても書きたくなってしまいます。

掲載初期と比べ、動物の治療、検査、麻酔管理等の内容は、現在は劇的に変化してきました。現在は、インターネットで世

界中の情報がすぐに得られたり、技術の進歩により過去に出来なかったことが可能になったりしています。その部分ではとても恵まれた環境にあると思います。

しかし、過去も現在も変わらないことが一つあります。それは、動物園獣医師として「どうにかして目の前にいる動物を長生きさせてやりたい」という気持ちです。

これからも、この信念を持って動物園動物の未来に力を注いでいきたいと思っています。



これも獣医師の仕事(ライオンの予防接種)